

〈第十二話〉

熊川の主争い

むかし。

標葉の郷野上の里に、中組の次郎太という名主が住んでいました。

ある晩のことです。真夜中にふと目をさますと、奇麗な女の子が枕元に座っていました。次郎太がびっくりして跳ねおきますと、女の子は静かに手をつけて、「お騒がせ致しましてすみません。実は私は蛇ばみが淵に住む熊川の主の大鰻です。近頃熊川の下流に住む水蜘蛛がだんだんと勢力をまして来て、実は明晩の丑の刻(二時)蛇ばみが淵で主争いの果しあいをする事になったのです。

つきましては、明晩の丑の刻になったら淵のほとりにそっと来て、果しあいが始まったら大声で、俺は中組の次郎太だぞ」と叫んで加勢していただけないでしょうか。

このことをお願いに参ったのです。」と、頭を深く垂れました。

「よいとも、よいとも、きつと出掛けて加勢してやるよ。」と人の良い次郎太はうなずきました。